

Natural Resource Environment and Humans

資源環境と人類

■ 論文

- 長野県霧ヶ峰地域における黒曜石原産地の定量分析値に基づく化学的区分と判別法の検討
隅田祥光・及川 穰 1

■ 報告

- 広島県三次市下本谷遺跡最高所地点の発掘調査
——後期旧石器時代前半期台形様石器群の検討——
及川 穰・下岡順直・灘 友佳・杉山歩夢・藤川 翔 15
- 神津島における黒曜石原産地の調査と菊若遺跡の石器
堤 隆・舟木太郎・池山史華・相川壤・大野李奈・片岡生悟 33
- 非破壊蛍光 X 線分析による長和町男女倉遺跡群黒曜石遺物の原産地推定
眞島英壽・須藤隆司 41
- ポータブル型蛍光 X 線分析装置を用いた東京都下原・富士見町遺跡の黒曜石石器の非破壊分析と原産地推定
眞島英壽・島田和高 51

■ 翻訳

- ディーター・シェーファー著 アルプスの小径を越える石器時代の狩人たち
小野 昭 63

- 黒曜石研究センター活動報告 2018 67

No.9

ディーター・シェーファー著 アルプスの小径を越える石器時代の狩人たち

翻訳：小野 昭^{1*}

本稿は Schäfer, Dieter (2014) Steinzeitliche Jäger auf transalpinen Pfaden. *Archäologie in Deutschland*, Nr. 6, SS. 52-53. を翻訳したものである。

“エツィー”（アイスマン）が発見された1990年代初頭以降、特にチロル地方に先史時代の人類によるアルプス地方の利用に関する詳細な調査研究の機会が訪れた。当時の知的関心の状況としては、中石器時代、わけでもオーストリアのそれは、あまり注目されていなかった。しかし、エツィー発見以後、後氷期の初頭は重要な研究上の焦点の時期となった。そして1994年の9月に、シュトゥバイ・アルプスにある、ゼーラインに近いフォッチャー溪谷の、海拔1869メートルの人目を引く岩壁の上で、“ウラーフェルゼン”遺跡は発見された（訳注1）。

気候条件が良好で、周囲に湧水地点が沢山ある遺跡の所在地フォッチャー溪谷は、すでに先史時代から人びとを何度も引き寄せていたのである。われわれは1994年から2004年までの間に、合算して12か月にわたる発掘日を費やして25㎡を精査し、約8000点の石器について3次元計測を行った。一部調査区の端にかかって発見されたものを含む14か所の炉跡は、石器などの遺物とは別に記録された。今日までの調査の成果として、遺跡のあるフォッチャー溪谷では、11000年前の中石器時代まで人類の居住が遡ることを示す証拠を得ることができた。こうした成果は、調査の時点では大きな驚きであった。というのも普通アルプスの北部は、南部と比較して気候条件が厳しく、比較的「発見物が稀な地域」とされていたからである。ところが今日では、まちがいなく気候条件の良いアルプス南部と同様に、アルプス北部地域がほぼ

同じ時期に利用されていたことを、われわれは知っている。だが、11000年前に人びとがどこからやってきたのか、そしてどのような理由が、ある意味で困難なチロルの山岳地に人びとをあえて向かわせたのだろうか。また、どうやって、例えばフリントのような自然の資源を、供給可能なものと知り得たのだろうか。

このような問題やさらに広範な課題には、考古学と自然科学のさまざまな研究方法上のネットワークによってのみ、答えることができる。そのため、地形景観に焦点をあてた「ウラーフェルゼン・プロジェクト」（訳注2）には30人弱の研究者が参加し、さまざまな研究課題に取り組んだ。例えば、氷河、土壌、植生のそれぞれの歴史的变化に基礎づけられた、最終氷期末から完新世初頭の気候変動、また遺跡の地形学の役割や特定の岩石、鉱物な



ウラーフェルゼン遺跡で精査する若い考古学研究者たち。

1 東京都立大名誉教授

* 責任著者：小野 昭 (ono@tmu.ac.jp)

ど自然の資源の出現と利用の果たした役割、そして樹木の役割などである。

狩人の集団はどこから来たのか？

フォッチャー溪谷へ人びとが足を踏み入れることは、気候がさらに回復して最後の氷床が後退することで初めて可能となった。いまから11000年前に最初の狩人たちがフォッチャー溪谷に到達したときには、ウラーフェルゼンはまだ森林限界よりも上にあっただけで、周囲を見渡せる眺望絶景の地点に位置していた。森林化が促進され森林限界が上昇するにともない、こうした狩猟戦略の利点は失われ、およそ9300年前以降は周辺の溪谷の一層高地を利用するようになった。

中石器時代の狩猟集団の起源に関するヒントは、石器を製作するためにフォッチャー溪谷に持ち込まれた石材にあった。最も質の良いフリントは、ウラーフェルゼンから直線距離で約110キロメートル離れたイタリアのトリエントの北西にある、南アルプスのノンスベルク（ヴァル・ディ・ノン）に産する。ウラーフェルゼンの地域にあるラディオラライト（Radiolarite 放射虫岩、放射虫化石に富む微細で均質な珪質岩＝チャート）は、60~80キロメートル離れた東部カールヴェンデルとローファン山岳地から運ばれた。同様に、石材として使われた水晶はウラーフェルゼンの東方ではほぼ等距離にあるトゥクサーアルプスとツイラーターラーアルプスに産する。これらの石材については、少なくとも部分的には、南アルプスの狩猟集団がウラーフェルゼンに持ちこんだにちがいないと考えられる。というのも、典型的な南アルプスの技術的伝統にもとづいて製作された水晶製の尖頭細石器が、ウラーフェルゼンで発見されたからである。その一方、同じようにウラーフェルゼン遺跡で記録されたドイツ・バイエルン原産の角岩は、直線距離で200キロメートル以上離れた、南フランケンアルプのケールハイムからもたらされた石材である。大変粗い結晶質の脈水晶は、フォッチャー溪谷の在地の石材であり、同じように石器づくりに、ただ散発的に使われた。



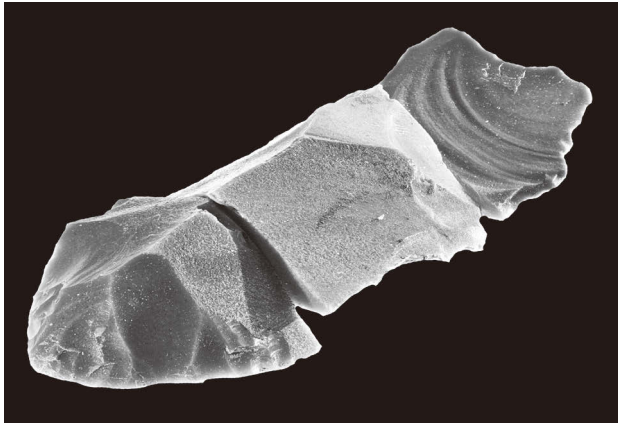
海拔1869メートルの岸壁の上にあるウラーフェルゼン遺跡（テントが発掘地点）。遠方中央がイン溪谷で、その背後にカールヴェンデルの山脈を望む。2002年に南方から撮影。

最初のアルプス越え

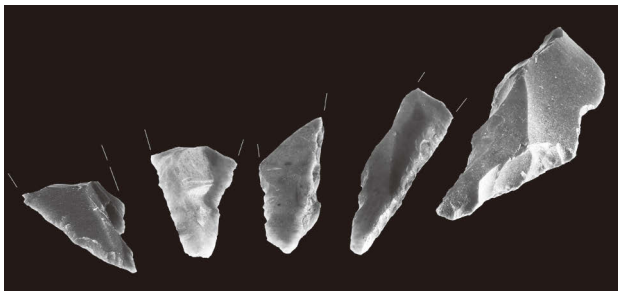
これらの成果の意味は、総じて、中石器時代の狩猟集団が季節的に山岳地に足を踏み入れたという重要な状況証拠だけにとどまらない。それはむしろ、完新世におけるアルプス横断を示す最古の証拠資料である。何千年もの間、アルプスを越える道が使われ続けた、もしくは森林限界を越えて、特にここが地形学的に最適の場であったということの意味している。したがって、二つの技術・文化的複合（コンプレックス）、つまり一方の南ドイツのポイロニアンと、他方は南アルプスのソーヴェテリアンとの接触を想定できるのである。

居住の場における典型的な活動、例えば特に毛皮、皮革、樹木の加工、道具の製作と狩猟で使った道具の再加工の証拠を、ウラーフェルゼンで明らかにすることができた。この遺跡で最近発見された、道具の取り扱いに関する良い例は、シラカバの樹皮から造られた、接着固定用の樹脂である。樹脂はここで造られた。つまり、一つの炉跡の一部にシラカバの樹皮が中石器時代の上部の相当層に覆われて発見されたのである。樹皮を乾留する過程で、多くの遺物の表面に固着して残る黒い樹脂が生成するのである。このようなさらに多くの成果がアルプスの中石器時代の一遺跡ウラーフェルゼンで初めて得られたのである。したがって、ウラーフェルゼン遺跡は、ヨー

ロッパ・アルプスの後氷期における狩猟・採集者たちが、資源をどう利用したかに関する歴史を解明する重要な参照例とすることができるのである。



数多くの接合資料の一例。もとは南アルプス産のフリント製スクレーパー（長さ約40mm）。



狩猟に使われた尖頭細石器。投槍の先端に装着された機能部（先端部）だけに加工が施されることが多い（長さ8mm～21mm）。

文献

Schäfer, D. (Hrsg.) (2011) *Das Mesolithikum – Projekt Ullafelsen (Teil 1)/ The Mesolithic Project Ullafelsen (Part 1). Mensch und Umwelt im Holozän Tirols 1*. Verlag Philipp von Zabern, Innsbruck.

訳注

1. この文頭数行は掲載誌編集部が付けた前文である。
2. 著者シェーファー教授が代表を務める、オーストリア・チロル地方の中石器時代を対象とする総合的研究プロジェクトである。ウラーフェルゼン遺跡の調査を中心に、チロル地方の全域を視野に研究が進められた。アルプスの山頂で、俗称「アイスマン」、愛称「エツツイー」、学名「ホモ・サピエンス・ティロリエンシス」が発見されてから、アルプスの山岳地域の考古学的調査への関心が急騰した。1994年の遺跡の分布調査中にシェーファー教授によって発見されたウラーフェルゼン遺跡の調査が本格的に開始された。一連の調

査により200か所を超える中石器時代の遺跡が発見され、完新世の初頭は人類集団の居住の痕跡が稀であると思われていた当該地域が、逆にアルプスを南北に越える盛んな交流の場であったことが解明された。

3. 写真は掲載誌ではカラー刷りである。

訳者あとがき

ここに訳出した小文は、冒頭に記したように『ドイツの考古学』の2014年の第6号に掲載されたウラーフェルゼン遺跡の紹介である。この雑誌は学会の専門誌ではないが、ドイツ連邦共和国の邦考古学者連盟の編集になる雑誌で、考古学関係の書籍出版の大手であるコンラート・タイス出版社から刊行されている。ドイツ全土で専門家から一般の読者層まで広く読まれており、「ヨーロッパの窓」という欄のオーストリアの話題として掲載された。

従来、北チロルは後氷期の完新世初頭の遺跡はあまり知られていなかったため、当該期には、人びとの交流は山岳地のゆえに盛んでなかったと思われていた。ウラーフェルゼン遺跡の調査の意義を一言でいえば、この前提を覆し、アルプスの高地を挟んで南と北で集団の交流がむしろ非常に盛んであったことを詳細に明らかにした点にある。

ウラーフェルゼン遺跡の正式の報告書は、著者がここに掲載した2011年刊行の第1巻目のモノグラフである。今までにドイツ語、英語で調査の中間まとめなどが刊行されている。シェーファー編（2011）の発掘調査報告書第1巻はA4判560頁の浩瀚なモノグラフであるが、英語による記載は全頁の13%で、他はドイツ語である。シェーファー教授の話によると、現在報告書の第2巻を編集中的なことであるが、第2巻は全頁英語で刊行するという。第2巻が刊行されれば、ドイツ語圏以外にも広く知られるようになり、ウラーフェルゼン遺跡がアルプス山岳地における中石器時代の基準的な遺跡として、詳細な分析結果とともに一層よく研究コミュニティに知られるに違いない。最後に、翻訳の許可をいただいたD.シェーファー教授にお礼申し上げる。また査読者の指摘により訳文の表現は改善された。記して感謝申し上げます。

参考文献

- ウラーフェルゼン遺跡に関連し、比較的手に入りやすい英文論集として次のものがある。
- Yamada, M., and Ono, A. (eds.) (2014) *Lithic Raw Material Exploitation and Circulation in Prehistory: A comparative perspective in diverse palaeoenvironments. ERAUL*, 138. pp. 37 - 45. Liège, Belgium.
- 同遺跡の日本語による簡単な紹介、書評、関連の小文には以下のものがある。
- 岩瀬 彬（2005）「オーストリア・北アルプス・ウラーフェルゼン遺跡－中石器時代のアルプス高山地域における人類活動の痕跡－」『考古学研究』52(3):108 - 111.
- 小野昭（2014）書評「完新世チロル地方の人類と環境第1巻 D.シェーファー編『中石器時代プロジェクト－ウラーフェルゼン』（第1部）」『資源環境と人類』4: 105 - 110.
- 小野昭・島田和高・橋詰潤・吉田明弘（2016）「オーストリア・北チロル地方の中石器時代遺跡群と高山景観の巡検調査」『資源環境と人類』6: 87 - 97.